「百姓漁師」と「漁師百姓」
海付きの村の生業複合と水田稲作

Farming-Fisherman and Fishing-Farmer：
Subsistence Composition and Paddy Field in the Sea Village

安室　知

YASUMURO Satoru

はじめに
❶「農漁民」という視点
❷漁師百姓の農と漁
❸漁師百姓の生計維持戦略
❹漁師百姓と百姓漁師
おわりに

［論文要旨］

本稿は前稿「『百姓漁師』という生き方－漁村類型としての『半農半漁』批判－」［安室，2010］の続編である。本稿では，同じ海付きの村の中にあっても多様な生活ぶりが存在することを，住民の自己認識を示す「百姓漁師」と「漁師百姓」に注目して検討する。

従来「半農半漁」と一括される海付きの村の生活には，実は大きくふたつの志向性が存在することがわかった。ひとつは百姓漁師であり，もうひとつが漁師百姓である。百姓漁師と漁師百姓は，自給性の側面では農と漁の複合生業という点で差はないが，稼ぎの側面では大きく異なる志向性を持つ。前者の金銭収入は漁に大きく依存するのに対して，後者は農・漁・運搬業といった金銭収入を生み出す複数の生業を持っていた。つまり，百姓漁師が特定の生業に稼ぎを特化させたのに対して，漁師百姓は稼ぎを多角的にするという生業戦略をとったといえる。

稼ぎに対する志向性の違いは，生業に関する家族間の役割分担にも影響を与えている。百姓漁師の場合は，男が金を稼ぎ，女が自家消費の生業を担うという役割分担が明確であったのに対して，漁師百姓ではそうした明確な男女の対比は不可能であった。漁師百姓は家族みんなで稼ぎに当たるとともに，自家消費面でもみんなで担うという生業戦略をとっている。

両者の生業戦略とくに稼ぎにおける志向性の違いを生み出す背景として注目されるのが水田所有の有無である。水田を所有するもの（漁師百姓）としないもの（百姓漁師）というように峻別できる。また，両者の生業複合度を大きく左右するのはコメの存在である。水田を持たない百姓漁師にとって基本的にコメは買うものであったのに対して，漁師百姓はコメの自給が可能であった。

と同時に，水田の存在やその所有のあり方が，海付きの村では社会的階層を示すものとなっている。つまり，水田はコメを作るためだけの空間ではなく，海付きの村にあっては社会階層を映し出す象徴的空間として存在したといえる。そして，その所有の有無は生業戦略の違いにも反映していた。それが佐島では「百姓漁師」と「漁師百姓」の違いとして顕在化したといえる。

【キーワード】百姓漁師，漁師百姓，海付きの村，生業複合，水田

はじめに

本稿は「『百姓漁師』という生き方－漁村類型としての『半農半漁』批判－」［安室，2010］の続編である。前稿では，「百姓漁師」という海付きの村に暮らす人びとの自己認識について考察した。その結果，海付きの村は，漁業だけで生活が成り立っているのではなく，農や行商，工場勤務など多様な生業を組み合わせて生計維持活動としていること，またそうした多様な生業の組み合わせは，けっして「半農半漁」というような概念で一括りできるものではなく，男女や老若の役割分担を基本に家族構成や市場のニーズを反映して時代ごと家ごとに個性的かつ可変的であることを明らかにした。

柳田国男がいわゆる海村調査を企画したのは昭和12年(1937)のことである。その報告の中で，「島の事情といふものは一つ一つが孤立であって，前に山村の調査で経験したやうな類推といふものが殆と望まれない」といい，山村との大きな違いとして海村ごとの独自性を挙げている［柳田，1949］。山村との違いかどうかは別として，海村での生活は家の個性や個人の嗜好といったものを反映して独自性のあるものとなっていること，また同じ海村であっても磯付きなのか浜付きなのか，また歴史的に漁業に特化した村なのか海運業や出稼ぎに重きをおく村なのかというように生計維持のあり方には多様性がある。柳田の目は海村生活の多様性と家ごとの個性に向けられていたと言ってよかろう。

後には，高桑守史が漁村の構造的な分類を試みる中で，柳田と同様に，農村の「平板性」に対して，漁村を「個性的」と表現している。そうした各漁村に個性をもたらす要因として，漁村が立地する自然条件とそれに応じた独自の展開を挙げている［高桑，1983］。

本稿では，前稿を受けるかたちで，同じ村の中にあっても多様な生活ぶりが存在することを，住民の自己認識を示す「百姓漁師」と「漁師百姓」という言葉に注目して検討する。それにより，従来は「孤立的」，「個性的」と一括りにされてきた海付きの村の暮らしぶりに，どのような共通する志向性が存在するのかを明らかにする。言い換えるなら，「半農半漁」という研究者による実態を無視した便宜的概念を見直し，住民の自己認識に基づいた漁村類型の設定を目指すものである。

なお，本稿も前稿と同様，海付きの村として取り上げるのは神奈川県横須賀市佐島（昭和30年当時，西浦村佐島）である。また，聞き取り調査の時間軸は，基本的には昭和20年代後半から30年まで（1950年代前半），つまり日本が高度経済成長に入る直前に置いている。

❶……「農漁民」という視点

(1)「農漁民」の発見

歴史学や社会学，地理学において，研究上の概念として漁村や漁民を設定しつつも，その生活は漁業だけで成り立つものではないという指摘はかねてからある。主として村の書き上げや経済統計等の資史料を用いて，それは示された。しかし，その実態は「半農半漁」といった括り方に示されるように，研究の多くは単なる生業技術の組み合わせの指摘にとどまるものであった。生業戦略と

いう視点から，その実態として，人が農や漁またそれ以外の生業をいかに組み合わせているか，その様相にまで踏み込んで議論するものはほとんどなかった。言い換えるなら，従来の研究は村や家を単位にして，そこで営まれる生業のレパートリーを挙げただけのものであった。

そうしたなか，アチック・ミュージアム（日本常民文化研究所）の流れをくむ河岡武春と辻井善弥はそれぞれ違ったアプローチから「農漁民」の概念を提出して注目される［河岡，1976・辻井，1977・1980］。研究概念としては一見すると稚拙にさえ思われる用語であるが，その持つ研究史上の意義は大きい。当然，研究者が創り出した半農半漁といった便宜的な概念とは根本的に発想や考え方を異にする。

河岡はおもに日本海岸にある潟湖周辺の低湿地に生きる人びとの生活から「農漁民」を発想している。体系化されずに終わったが，河岡の低湿地文化論の根幹をなす概念であるといってよい。「漁民の水鳥猟」［河岡，1977］という論文にそれは象徴される。当時の民俗学における技術中心の生業論においては，漁民は魚を捕るものであり，水鳥を捕るのは猟師であるというのが常識とされる中にあって，ほとんど無視されてきた複合的な視点を提示している。

それに対して，辻井はおもに三浦半島の磯場において生きる人々に焦点を当て，台地の畑作と谷戸の稲作そして海辺での磯漁という複合的な生業のあり方を象徴させて農漁民を発想している。この二人がまったく違った海浜環境に暮らす人びとの生活から農漁民という概念に到達したことは，海付きの村における基本的な生計維持方法として農漁民という概念が普遍化の可能なものであることを示唆している。

磯根や潟といった水界に隣接して暮らす人びとの生業をつぶさにフィールド・ワークし，「農漁民」として概念化することによって，その基本となる生計維持のあり方が複合生業にあることを明らかにしたことは重要であろう。その後も，何人かの研究者により，海付きの村の生業が複合生業にあるとする事例研究が積み重ねられてきている（たとえば，［田辺，2005］）。そうした農漁民が作る村は当然「漁村」である訳がない。

また，海付きの村の生計は，地理的立地や歴史環境に応じて，漁や農などいくつかの生業技術を複合させることにより成り立つものであり，そのとき複数の生業が男と女，老人や子ども，親類縁者といった人々の相補的関係により担われていたことが実証的に示されるようになってきている（たとえば，［田村，2002］）。

そうした中で，卯田宗平は三浦半島と類似する環境にあるの房総半島を事例に，住民自身が「両テンビン（両天秤）」と概念化する生業戦略を明らかにしている［卯田，2003］。そのなかで，生業を複合させる目的は，不十分な生産力を補う相互補完的な意味よりも，潜在的な生産力を最大限に引き出すための戦略にあるとした。

(2)「農漁民」へ至る道

文献史学においては，網野善彦の登場以降，いわゆる「百姓」の生業について見直し（たとえば，［網野，1991］）がおこなわれた意義は大きく，民俗学にも多大な影響を与えている。一例をあげると，泉雅博は近世社会において階層的に「百姓」の下位に位置づけられる「頭振」に注目して，「これまで頭振は，無高の貧しい農民，と一般に評価されてきたが，その実情は意外にも，農民というよ

り非農業民的な生業を営む人々により近く，富裕な頭振も多く存在することが確認された」とする。頭振を無高の貧しい農民と捉える見方は領主側のものであることを指摘し，「領主の発給する触書・達書等に依拠して描かれた頭振像といえる」と痛烈にそれまでの文献史学を批判する［泉，1992］。こうした網野らによる，百姓とは生業や職業の種類を示すものではなく，社会的な「身分」であったという主張は，現代に調査時点を置く民俗研究においても大きな共感を得た。

ただ，90年代までの百姓像の見直し論にみられる基本的な研究スタンスは，百姓という身分には様々な生業が存在すること，具体的には百姓のなかには廻船業者や商工業者がいることを示すものである。つまり，それは百姓個人のレベルでは生業は何かひとつのものに特化しているかのように扱うもので，複合的に生業を営むという問題意識のもと個人の生業戦略を明らかにするという視点はなかった。早くは網野の「百姓」見直し論により，そうした複合生業的な視点は出されているが，管見の及ぶ限り，それが文献史学として十分に深められた形跡はない。

そうしたなか，90年代以降に盛んになる農間稼ぎや身分的周縁の議論は重要である。深谷克己は「百姓専一」が理念的百姓像にすぎないこと，それに対して実態的農民像として諸稼ぎに依存する百姓に注目する。そうした諸稼ぎに依存する実態農民の農家経営として，「家族内協業」や農業を逸脱する「諸業」の指摘は生業研究への複合的視点を示すものとして評価される［深谷，1993］。近年では，近世の村内にあって百姓による多様な諸稼ぎの姿を描くとともに，村にいながら農業を放棄して小商人や職人となってゆく百姓の存在も明らかになってきている［平野，2004］。

また，身分的周縁論について，吉田伸之は近世都市社会における，香具師や移動商人を例にして興味深い指摘をしている。吉田は，士農工商という身分制度の周縁に存在する人びとを理解するため，その生業の実態に注目したが，その結果，他者認識される職業と実際の生業とが乖離する例が多いことを明らかにしている［吉田，1998・2003］。

さらに，網野らの百姓論を受け継ぐかたちで，山方の「百姓」についても検討が進められている。具体的には，焼畑や水田耕作をしながら，狩猟などの農間余業をおこなう近世百姓の実態が明らかにされている［武井，2006］。複合生業的な百姓の実態が中世にとどまらないことを明らかにしたことは，河岡や辻井が近代において発見した「農漁民」との間隙を埋め，さらに本稿で注目する現代の百姓漁師に繋がるものとして注目される。

(3)「農漁民」と「百姓漁師」

河岡や辻井が見いだした農漁民という視角に関連するものとして，本稿で注目するのが百姓漁師と漁師百姓である。まず，百姓漁師について前稿において検討してきたことをまとめると，その条件として以下の8点を挙げることができる［安室，2010］。

1. 耕作面積10㌃以下という土地所有上の最多層に属すること
2. 牛馬を所有しないこと
3. 水田を所有しないこと
4. 農による生産物のほとんどは自家消費されること
5. 自家で消費する魚介類のほとんどは自ら漁獲したものであること
6. 「商売」と称する金銭収入のほとんどが漁に依存すること

7.「海の組合」（漁協）の正規組合員であること

8.「百姓漁師」と自称すること，また村内他者にもそう認められること

この条件のなかで，もっとも重要な点は，住民自身が百姓漁師を自称していることである。三浦半島の一村である佐島に限らず，百姓漁師という自称は日本各地の海付きの村にみられる。その点でいえば，農漁民は研究者が海付きの村に暮らす人びとの生活実態を概念化したものであるのに対して，百姓漁師は住民自身の自己認識がいかなるものかを示している。当然，農漁民と百姓漁師とは研究概念としては完全に一致するものではない。いわば百姓漁師が海付きの村に暮らす住人の自画像とするなら，農漁民は他者像ということになろう。その自画像と他者像との齟齬の中に，もうひとつ本稿で注目する「漁師百姓」（「百姓漁師」とは区別される）がある。その「漁師百姓」に注目して以下では論を進めることとする。

❷……漁師百姓の農と漁

(1)「漁師百姓」とは

佐島では「百姓漁師」に対して，「漁師百姓」という言い方をすることがある。漁師百姓とは，文字通りに解釈すれば，漁もおこなう百姓ということになろう。百姓漁師のなかでも，農業に力を入れている家をとくに区別して漁師百姓と呼ぶことが多い。

昭和 25-30 年においては，佐島約 300 戸のうち百姓漁師が圧倒的に多い階層であるのに対して，漁師百姓と認識される家は 20 戸ほどしかない。百姓漁師の場合，農業はほとんどが自家消費の域にとどまり，かつコメはほとんどすべてを漁の稼ぎ（金銭収入）で購入していた。

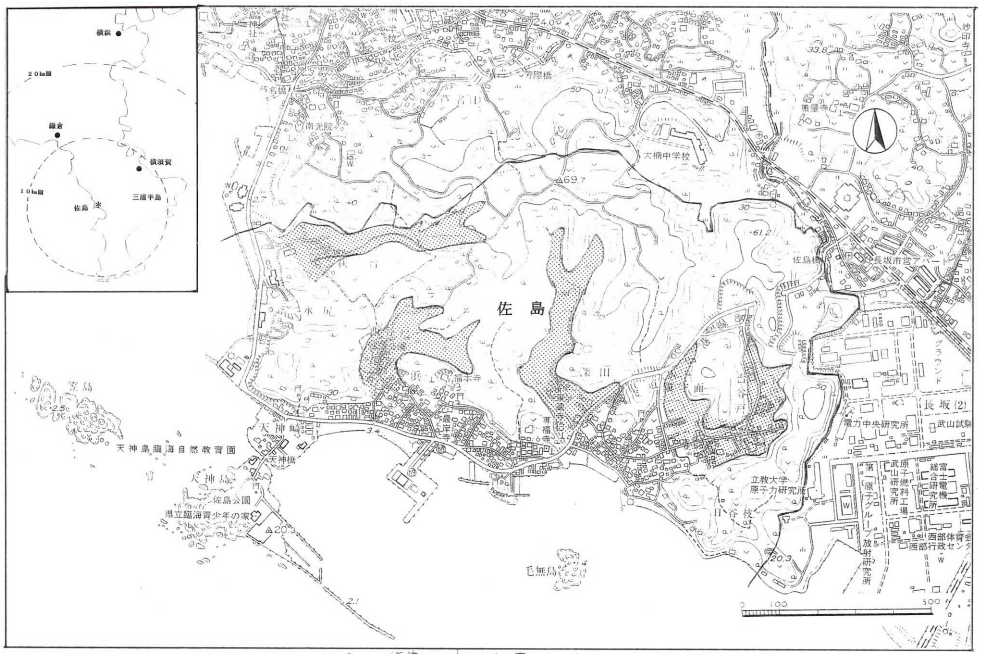


図1　佐島の立地（国土地理院地形図）　※網掛け部分は谷戸（ヤト）

写真１　ヤマからみた佐島集落（神奈川県横須賀市）

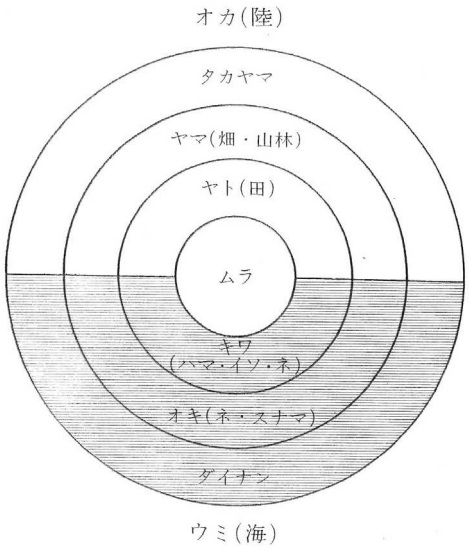


図２　佐島の生業空間概念図

それに対して，漁師百姓は漁により稼ぎを得るとともに農業でも稼ぐことのできた階層である。漁師百姓は最初から売ることを目的に農作物を作る，つまりそれだけ多くの耕地を所有することに特色がある。百姓漁師の場合は稼ぎが漁にほぼ単一化しているのとは対照的である。象徴的には，百姓漁師は水田を持つことはないのに対して，漁師百姓は水田を所有している。ただし，漁による稼ぎが百姓漁師に大きく劣るというわけではない。そのため，農業による収入を持つ分，百姓漁師よりも金銭収入や資産の点で裕福な階層に属していた。漁師百姓の場合，村内でもそのように他者認識されていることは重要である。

そう考えると，漁師百姓は水田を含む土地持ちの裕福な百姓漁師だということもできる。農と漁の生業複合を基本としつつも，農の方向に大きく振幅の針が振れたときが漁師百姓だともいえる。そのように外部（研究者など）からみたときには漁師百姓は百姓漁師のバリエーションのひとつとされるが，佐島内では両者を区別する意識が強い。具体的には，百姓漁師の中でもとくに「土地（水田）持ち」「本家筋」「裕福」といった要素により区別する意識が強く働くとき，漁師百姓という言い方が意味をもってくる。

ただし，土地持ちで裕福とはいっても，それはあくまでも同じ村内における百姓漁師に対しての相対的なもので，後に述べるように所有する水田はもっとも多い家でも１町歩（1ヘクタール）に満たない。つまりは，漁師百姓の場合，「土地持ち」とはいっても，三浦半島の内陸部にある農家（オカモン）と比べれば，ごく平均的な耕作面積しか持たないといってよい。

そうした漁師百姓の家のひとつにＦ家がある。その当主であるＦ氏は明治42年（1909），佐島のごく平均的な百姓漁師の家に生まれている。そして，第２次大戦後，南方の戦地から引き揚げてくるとすぐに漁師百姓のＦ家に婿に入った。Ｆ家は佐島では本家筋に当たる家柄の一軒である。ごく大まかに昭和25-30年当時のＦ家内の仕事分担を示すと以下の通りである。当主であるＦ氏が漁＋α（賃稼ぎや農），妻と義父母が農を主として担当する。

漁師百姓の生業上の特徴は，複数の現金収入源を有することにある。詳しくは後述するが，Ｆ家の場合，昭和25-30年当時の主な現金収入源として挙げられるのが，農による稼ぎ，ウシ（運搬）による稼ぎ，漁による稼ぎの３つである。

(2)漁師百姓の稲作－女性労働の意味－

昭和10年（1935）の国勢調査をみると，佐島は家数が250戸を超えるものの水田はわずか8町6反（8.6㌶）しかない［神奈川県教育庁指導部文化財保護課, 1971］。それらはすべてヤトダ（谷戸田）であった。

ヤトダはヤトと呼ぶ浅い谷地形の底部に作られているため，川に沿って（海岸から内陸に向け）細長く分布する。図1にあるようにそうしたヤトが佐島には4箇所ある。ヤトダの多くはヌマタ（沼田）と呼ぶ湿田になっていた。また谷間にあるため総じて陽当たりは良くない。そのため佐島の水田はすべてコメのみの一毛作であった。

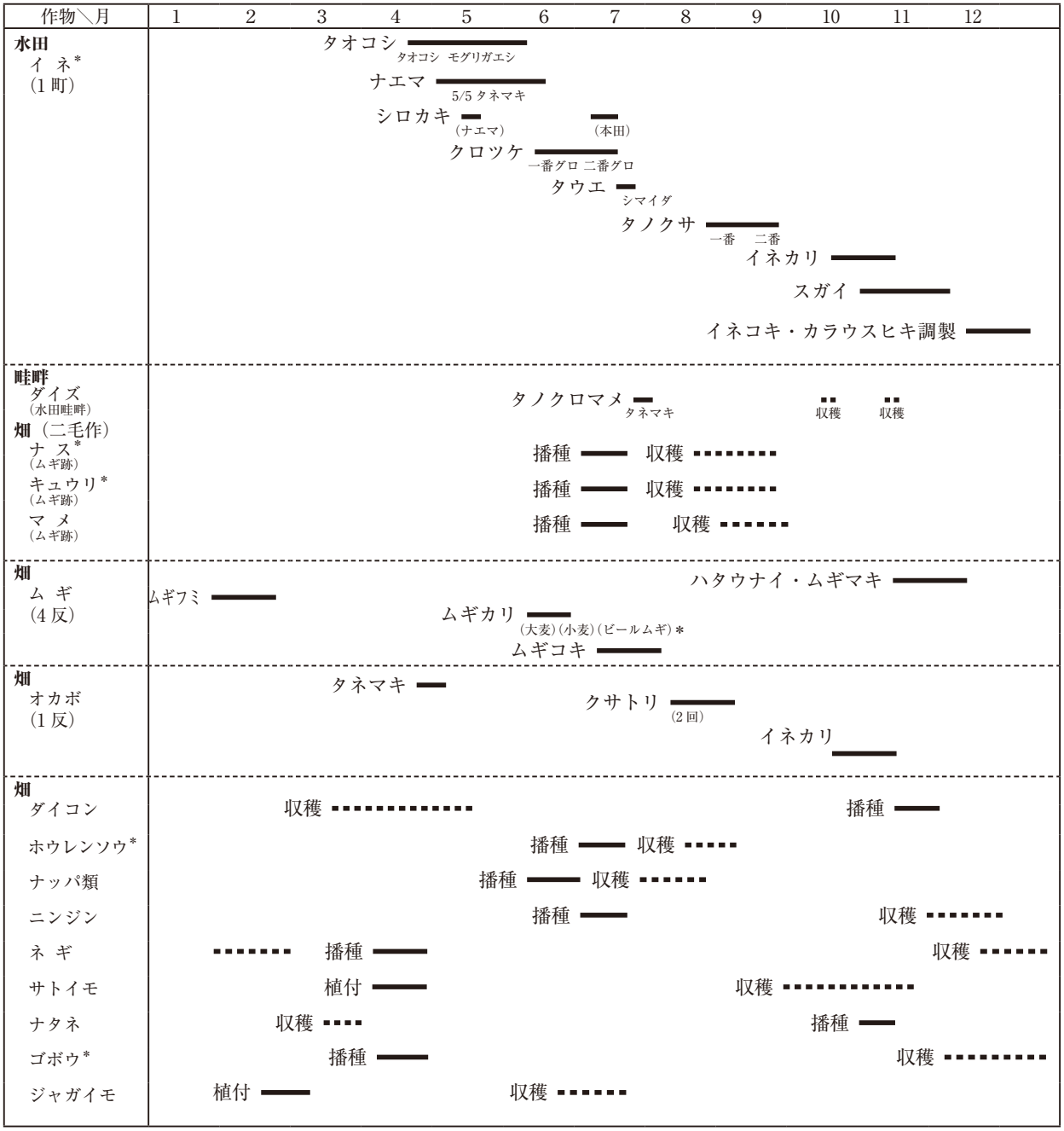
昭和25-30年当時，多いときには1反（10㌃）当たり玄米で5俵（300㌔）ほどの収穫があったが，湿田のため栽培できる品種は限られていた。また，どのような品種を作っても高く売れるような美味しいものはできなかったとされる。佐島のヤトダは，1枚が1畝（1㌃）から大きいものでも5畝ほどしかなかった。F家では合計9反の水田を持っていたが，それは15枚に分かれていた。平均すると，1枚当たり6畝となり，佐島の平均より大きくなるが，それはF家の田の多くが隣村の長坂（オカの村＝内陸農村）にあったためで，なかには1枚が1反5畝のものもあった。

9反の内訳を見ると，1930年代の第2次大戦以前には5反が自作地で4反が小作地であったが，戦後の1950年代にはすべて自作地となっている。水田の所有でいえば，F家は佐島の中ではもっとも所有面積の多い階層に属する[(1)]。漁師百姓の多くは3反から5反程度の水田所有が一般的であった。漁師百姓の場合，コメは自家消費分を除くすべてを売っていた。漁師百姓にとって，コメは自家消費作物であるとともに換金作物でもあった。百姓漁師にとってコメはすべて買うものであったこととは対照的である。

水田水利に関しては，ヤトダの場合，ヤトの中心を流れる小川の水や天水を田越しで利用することが多い。それでは用水には不十分であったが，その点は元来湿田であることが好都合に作用した。また，そうした用水不足を解消するため，佐島にはセキ（溜池）が1箇所作られていたが，それは個人管理の小さなものにすぎなかった。なお，F家では，隣村の長坂にある大きなセキ（60軒で権利を持つ溜池）の水を利用していた。

水田作業の多くは女性と隠居老人の労働力でまかなわれた。また，ウシを用いておこなうタオコシ（耕起）とシロカキ（代掻き）以外はすべて手作業であった。佐島の稲作で，興味深いのは田植えである。ユイのような共同労働はまったくみられない。それでいながら，田植えは同時にやらなくてはいけないとされる。用水のためではなく，ひとりだけ早く植えるとそこにみな虫が付いてしまうからだとされる。

稲作農村においては一般的といってよい虫送りのような農耕儀礼はおこなわれない。それは「オカの百姓」がやるものだとされる。唯一，田植え後にシマイダ（仕舞田）の儀礼がおこなわれる。また，畑作儀礼としてムギマキ（麦播き）後にはネズフサギ（鼠塞ぎ）の儀礼がおこなわれる。「オカの百姓」がおこなう稲作儀礼（播種・田植え・稲刈り・籾摺り・予祝など稲作工程の各段階に設定される）に比べると，はるかに簡素である。かつまた，儀礼の回数でいえば畑作儀礼と稲作儀礼との差がほとんどないという特徴がある。日本の場合，平地の農村では稲作儀礼が畑作儀礼に比べ圧倒的に多くおこなわれる傾向にあることとは対照的である。



※　*印は稼ぎ(現金収入源)となるもの
※　1月1日から15日までの正月，8月13日から16日までの盆，および7月11日の天王様，11月11日の霜月のお神楽(熊野神社)等の祭日は仕事を休む。

図3　漁師百姓の農耕暦

(3)漁師百姓の畑作－男性労働の意味－

佐島では，一般に「ヤマに行く」と言った場合，それは畑仕事に行くことを意味する。民俗空間としてのヤマ（集落に迫る台地状の傾斜地）に畑が多く分布するからである。昭和10年（1935）

の国勢調査によると，畑は33町9反6畝（33.96㌶）あり，その面積は水田の約4倍に当たる［神奈川県教育庁指導部文化財保護課，1971］。

Ｆ家では，昭和25-30年当時，畑作物として，ムギ（オオムギ，コムギ，ビールムギ），オカボ，ダイズ，ダイコン，ナス，キュウリ，ニンジン，ゴボウ，ホウレンソウ，サトイモ，ジャガイモを栽培していた。ホウレンソウは商品作物として作り，キュウリ・ナス・ゴボウも一部だが出荷していた。

ムギはオオムギ，コムギ，ビールムギを合わせて4反，オカボも1反ほど栽培した。ダイズ，キュウリ，ナスといった作物の収穫後に，畑二毛作でムギを作る。オカボやサトイモは日陰にある少し湿った畑を利用する。ともに自家用である。ムギの場合，オオムギとコムギは自家消費のために作っていたが，ビールムギは商品作物であった。ただし，ビールムギの栽培量はそれほど多くない。もっとも栽培量が多いのがオオムギで，食糧となるほか，ウシの飼料としても用いた。

なお，佐島では水田に比して畑の面積が約4倍と多いが，Ｆ家の場合，経営する耕地は水田9反に対して畑6反と水田の方が多い。隣村の長坂に多くの水田を持っていたからである。Ｆ家は佐島ではもっとも多く水田を耕作しており，畑の野菜とともにコメでも稼ぐことができた。

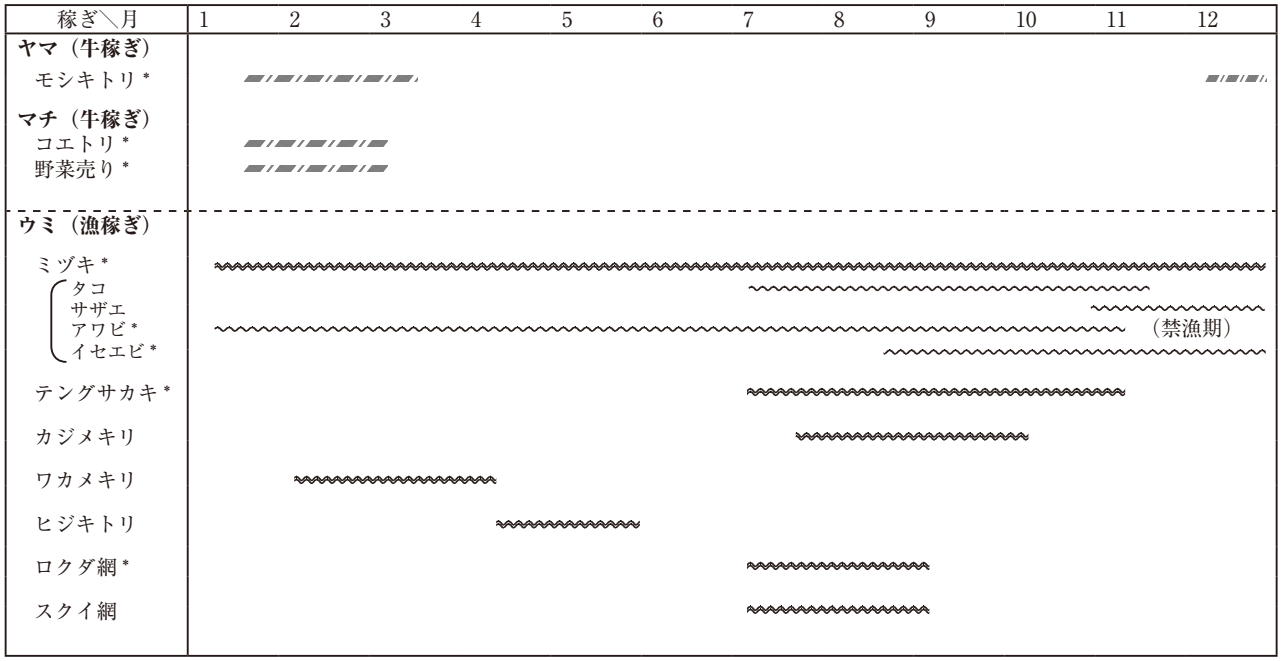
Ｆ家のような漁師百姓の家においても，成人男子（家の主人）の主要な稼ぎは漁である。ただし，どうしても男手が必要なときには漁を休んで農を手伝った。漁を休んででも手伝わなくてはならない農作業に田植えとムギマキがある。田植えは，家族に雇った田植え人夫（婦）を含め10人ほどの人手で一気に終わらせる。前述のように，ユイのような労働交換の慣行はない。そうして，できるだけ漁を休む期間を短くする。漁を休むことで失う稼ぎと田植えに人を雇うことで必要となる費用とを比較して，出銭が最低限ですむようにする。

また，ムギマキの場合には，耕地にまずスジヒキ（筋引き）をし，それに沿って土をクワで起こしてゆく。そこに堆肥を撒いてからタネマキをする。その作業は一連のものとしておこなわれなくてはならないため，ムギマキにはどうしても4人の人手が必要となる。クワで土を起こす役1人，堆肥を施す役2人，種まき役1人の計4人である。このとき，種まき役は一番力の弱い老母でよいが，堆肥を施す役に妻と老父，そしてクワで土を起こす役として力のある男手（Ｆ氏）が必要となった。こうして家族4人が一組になって，1日に2反（20㌃）のムギマキをこなしていった。

(4)漁師百姓の漁－農との複合関係－

漁師百姓のＦ家では漁をおこなうのはＦ氏ひとりにほぼ限られていた。百姓漁師の家では女性もオカドリのような自家消費を目的とした漁をおこなうことは一般的であったが，Ｆ家では女性が漁に従事することはない。

昭和25-30年当時，Ｆ氏の漁は磯漁が中心であった。それは図4に示したとおりである。夏を除いてほぼ一年中，断続的にではあるがミヅキ漁がおこなわれる。それは，時期により，アワビ，サザエ，タコ，イセエビと主たる漁獲対象を変えている。また，ミヅキに並行し，夏場を中心にテングサやカジメの採集をおこない，かつロクダ網（六駄網）やスクイ網といった小型の網類によりコノシロ，アジ，アオリイカ，エビなどの魚介を時期に応じて捕っている。なお，結婚（Ｆ家への婿入り）前つまり第2次大戦で召集されるまでは夏期にモグリをしていたが，戦後は戦地（南方戦線）



※　＊印は稼ぎ（現金収入）の良いもの
※　ワカメキリやテングサカキはオカドリを中心にミヅキでもおこなう。
※　モシキトリ，コエトリ，野菜売りはともにウシによる運搬販売である。
※　1月1日から15日までの正月，8月13日から16日までの盆，および7月11日の天王様，11月11日の霜月のお神楽（熊野神社）等の祭日は仕事を休む。

図4　漁師百姓の漁撈暦と稼ぎ

写真2　ヒジキトリ

写真3　テングサ干し

で患ったマラリヤのため治癒後もモグリはできなくなった。

当時，F氏における漁撈の組み合わせパターンの特長は，ミヅキ漁を中心にして，そこに海藻採集と魚介類の網漁を組み合わせることに特長がある。佐島ではもっとも典型的な漁撈パターン（つまり百姓漁師の典型的な組み合わせのパターン）である冬場のミヅキ＋夏場のモグリという組み合わせをとらない。また，前稿［安室，2010］において示したI氏のように磯漁（ミヅキ＋モグリ）に一本釣りのような沖漁を組み合わせることはなく，F氏の漁はすべてが磯漁であることも特長のひとつとなる。つまり，F氏の漁撈パターンは，ミヅキを中心にして磯漁に収斂するものであった

といってよい。

このことは，漁の組み合わせの都合からだけで選択されたものでないことは確かである。つまり漁師百姓であるＦ氏の場合，前稿で注目したＩ氏のような百姓漁師とは違って，完全に農を妻や老父母に任せきりにすることができないため，かなりの部分で農の手伝いをしなくてはならない。そうしたことを可能にする漁の組み合わせパターンがミヅキ漁を中心とした磯漁への特化であるといえよう。

その理由としてまず挙げられるのは，ミヅキはすべての作業が一人でおこなえる漁であること。また，漁場を岸からの延長であるキワの磯根に限定することで，短時間で漁に出たり戻ったりすることが可能となる。さらに，竿を用いて魚介類を採捕するミヅキ漁は，１所作が１漁として完結するため，時間的には臨機応変な対応が可能で，短時間の漁に向いている。何時間も掛けて漁場に赴き，半日単位で漁をしていなくてはならない沖の一本釣りや，一度おこなうと極度に体力を消耗するモグリではそうはいかない。農との組み合わせやそれに伴う家族間の役割分担の中で，Ｆ氏の漁撈技術と漁撈パターンは選択されたといってよかろう。

❸……漁師百姓の生計維持戦略

(1)労働の繁忙期への対処

稼ぎ（金銭収入）がほぼ漁に単一化している百姓漁師に比べると，漁師百姓の稼ぎは多角的である。漁師百姓であるＦ家では，稲作，畑作，漁撈だけでなく，後に詳述するウシを使ったコエ（下肥）やモシキ（薪）の運搬販売業も冬場の重要な稼ぎとなっていた。当然，漁師百姓の場合は，複数の稼ぎが重なり合う労働の繁忙期をいかに乗り切るかが生業上の要件となった。前章において，農と漁の関係については検討しているので，以下ではとくに労働が重複する稲作と畑作の関係に絞って繁忙期の対処法をみてゆく。水田を持たない百姓漁師とは違って，漁師百姓の場合，畑作作業と稲作作業の労働重複をいかに克服するかは大きな問題となる。

田と畑の仕事が重複する繁忙期には明るいうちにヤマ（畑のこと）から下りてくることはなく，必然的に夕飯はいつも午後９時過ぎであったという。そうした繁忙期としてまず第一に挙げられるのが，田のイネカリと畑のムギマキが重なる10月から12月にかけての時期である。ダイコンの植え付けやオカボの収穫もこの時期におこなわれる。この時期は田植え時と違って人を雇うことはせず，成人男子（主人であるＦ氏）が漁を休んで人手を補った。とくにムギマキには前述のように男手は不可欠であった。イネはワセ（早稲）とオク（晩稲）を作ったが，とくにオクの方はムギマキとほとんど時期が重なってしまった。

この時期，稲刈りをした後はハザに干す方がコメにはよいとされるが，そのための人手が手当てできない。そのため，スガイ（スガリ）と言って，刈り取ったイネはいったんアゼ（畦）やクロ（畔）の周囲に穂を下に向けて立てかけて置いておき[(2)]，ムギマキに取りかかったという。そうして，ムギマキを終えてからイネコキなどイネの調製に取りかかったが，そのときはすでに12月になっている。そのため，雨が多い年にはムギマキをしているうちに稲籾の部分が湿って芽を出してしまうこ

ともあったという。

また，さらにいえば，畦畔で栽培されるタノクロマメ（ダイズ）の収穫がなされるのも同時期である。それはイネカリやムギマキの合間を見ておこなわれる傾向にある。そのため稲刈り前（9月）と稲刈り後（11月）に収穫時期がまたがってしまうこともあった。つまるところ，その年のイネカリとムギマキの仕事の進み具合で，タノクロマメの収穫時期は大きく左右されることになる。タノクロマメの場合，その播種も次に述べる第二の繁忙期と重なっているため，田植えの後のわずかな空き時間を見つけてなされなくてはならなかった。

タノクロマメは，クロヌリ（畔塗り）の後，土が乾ききる前にクロの表面に指で突いて穴をあけ，種を蒔いてゆく。タノクロマメの播種には特別な道具や技術は必要とせず手間も掛からない。また，その後の管理においても，とくに肥料や水を与えることはなく，草取りもしない。まったくといってよいほど粗放的である。タノクロマメ栽培はまさに隙間を埋める生業であったといえる。

こうした隙間を埋めるような労働のありかたは，タノクロマメのような畦畔栽培自体に本来的に備わった特徴であるといえる。F家の場合，田5，6枚のクロから毎年1俵（60㌔）ほどのダイズを収穫することができた。しかも実ったダイズは畑で栽培したものに比べると大粒で味がよいとされ，枝豆として食べるほか味噌の原料にも利用された。タノクロマメは漁師百姓の自給的な食生活には欠くことができないものとなっていた。

第二の繁忙期は，田植えとムギコキ（麦扱き：脱穀）が重なる時期である。このほかにも夏作物の播種・植え付けの時期と重なる。さらに，この時期は梅雨のため余計に時間的な余裕はない。そのため，ムギカラ（麦桿）は三浦半島の特産物のひとつであるスイカを栽培するときの下敷きとしてオカの農家に需要があったが，売り物にできるほどきれいにムギカラを刈り取る余裕は時間的にも労力的にもなかった。ムギカリをするとムギを穂のまま少し寝かしたあと，そのまま畑の中でムギコキをした。そのときムギカラは畑に撒いて火を付けて燃やしてしまう。(3)

こうした繁忙期における人びとの行動や先に示した農耕儀礼のあり方をみると，漁師百姓はイネに絶対的な価値を置くことはないことが理解される。つまりは，佐島のような海付きの村においては，稲作は生業労働の上で畑作や海の漁と並立的な関係にあったといえよう。

(2)農と漁の優先関係

漁と農の優先関係や家族間における労働分担の様相について生計維持戦略という視点から考察してみる。前述のように，主人であるF氏が漁とウシを使ったコエやモシキの運搬販売およびその他の小稼ぎを，妻と老父母が農を，それぞれおもに担当している。ただし，基本的にそうした役割分担はあるものの，F氏は漁の合間を見て農の手伝いをおこなう。漁は岸に近いキワのイソネを主な漁場とした。また，対象魚種や漁法を変えてゆくことで，ほぼ一年中仕事があるが，反面では天気や風･潮の加減で出漁できないことも多い。そのため，臨機応変に農の手伝いをすることができた。また，前述のように，どうしても農に手伝いが必要なとき（ムギマキと田植え）には，漁を休み農を優先する。

冬の場合は，主たる漁であるミヅキが西風の影響でおこなえない日も多い。そのため，月に5，6日の割合でコエトリをしに横須賀の町場に通うことができた。コエトリは主人（F氏）が担当す

る小稼ぎのひとつであった。コエトリは後述するように，牛馬を飼養しているからこそ可能になる稼ぎであり，その意味では漁師百姓に特徴的な生業といえる。

同じように，主人の担当する小稼ぎのひとつに冬場のモシキトリがある。F家では2反（20㌃）ほどのマキヤマ(薪山)を持っていたが，ミヅキ漁やコエトリに行かないときにはモシキトリをした。木を伐っては，直径30センチほどの束にして，それを50把作るのが1日のノルマとなった。これは横須賀の町場に持ってゆくと売ることができた。モシキトリは百姓漁師とも共通する生業であるが，コエトリと同じようにその運搬・販売には牛馬の飼養が不可欠であった。そのため，モシキトリは自家消費にとどまる百姓漁師とは違って，漁師百姓の場合には自家消費に余る分を売ることで稼ぎの一部にすることができた。また，役割分担に関して興味深いことは，百姓漁師の場合にはモシキトリが女（一家の主婦）の仕事であったのに対して，漁師百姓ではもっぱら男（主人）の仕事とされていたことである。そうした意識の違いは，それが稼ぎに結びつくかどうかによるものであるといえよう。

田植えからムギコキの時期にかけては，アオリイカ，トビ（トビウオ），タコ，テングサといった魚介類を捕ることができる，とくに1960年代にはアオリイカとテングサはよい稼ぎになった。そのため，田植人足の出費とテングサ・アオリイカ漁の稼ぎを天秤にかけ，田植えに関しては，雇い人を使うことで，F氏の手伝いを最小限にして漁の稼ぎを優先していた。ただし，後にテングサの値が下がるとその分の労力を農の方に振り向け，農の雇い人を少なくしていった。つまり，その状況に応じて，漁と農とは天秤に掛けられ，より稼ぎが大きくなるようにF氏の労働は案配されていたといえる。

そのように農と漁の関係は，市況や天気また家族構成など時々の状況に応じて漁が優先されたり農耕が優先されたりするといえる。そうした臨機応変な対応は，百姓漁師と対照したとき明確になる漁師百姓の特徴である[(4)]。

(3)漁師百姓の小稼ぎ－コエトリ－

2，3章では漁師百姓の農と漁について記したが，それにプラスしておこなわれる諸稼ぎがある。そのひとつがウシを用いた運搬業としてのコエトリ（肥取り）である。その特徴は，農と漁が稼ぎの側面とともに自給的な意味も大きかったのに対して，金銭の稼ぎを主たる目的にしている点にある。

肥料をめぐっては，モクやキリダルが海付きの村とオカの村（農村）とを結びつける役割を果たしたこととは対照的に，肥料を介して海付の村と町との交流が促進される例がある。それがコエと呼ぶ人糞尿である。人糞尿を町に取りに行くこと，およびそれを売って金銭を稼ぐことをコエトリと呼んでいる。それはもっぱら漁師百姓が担っており，漁師百姓の複合生業のひとつに位置づけられる。

漁師百姓のF家は，前述のように，漁と農を主な生業としつつ，農耕牛を用いて運搬業もおこなっていた。その運搬業の主力がコエトリである。F家の他にも牛馬を飼っている家ではコエトリをおこなっていた。佐島の場合，コエトリをおこなう家はウシやウマを飼っていけるほど多くの田畑を有する階層であり，20戸ほどしかない。そうした意味で言えば，コエトリは漁師百姓に限定され

た賃稼ぎ仕事であった。

Ｆ氏は，婿に入った昭和20年代から昭和35年ころまでの間，佐島から横須賀の町場（上町や深田台などの住宅街）まで片道6里（24㌔）の道範を牛車をウシに引かせてコエトリに行っていた。正月休み明けの1月15日から3月くらいまでの冬季の仕事で，3-7日に1度の割合で通った。1軒当たり，ひと冬に6回程度，月に3回は行かないと汲み取りが間に合わないとされる。

コエは自家用にするとともに大半は売るためのもので，役所に届けて金を納め，汲み取りの許可を得ていた。納める金額は，昭和30年頃，汲み取り先30軒分で15円ほどであった。そうして役所では汲み取りの申請者にそれぞれ地区を割り当てていた。

コエトリには朝4時に佐島を出発し，村に戻ってくると夕方であった。牛車に積める15本の肥桶をすべて満たしてから昼食をとるが，横須賀上町のほぼ決まった食堂に立ち寄った。コエをいっぱいに入れると肥桶1本が11貫（約36㌔）になった。昭和20年代には肥桶1本分のコエは25銭で売ることができるため，1日で2円75銭の儲けになった。ひと冬に20から25回程度コエトリに行くが，それで試算すると，55円から68円ほどの稼ぎになったことになる[5]。汲み取ってきたコエは牛馬を飼うことのない佐島の百姓漁師の家が買い求めた。なお，買ったコエは山の畑の脇にあるタメにいったん入れて熟成させてから使った。

汲み取り先においてコエトリは本来は無料でおこなうものだが，昭和30年代には汲み取りに行った先で礼としてタバコや金銭をもらうことができた。ただし昭和20年代は，反対に汲み取り料を役所とは別に各家にも納めて人糞尿を取らせてもらっていた。

さらにＦ氏の場合は，コエトリのついでに，行きは横須賀の青物市場に自家の畑で栽培した野菜を運んだり，帰りには佐島の人に頼まれものを配達したりして手間賃を稼いだ。

以上のように，肥料となるモクの採集が百姓漁師と漁師百姓の区別なくおこなわれたのに対して，コエトリは漁師百姓に特徴的な生業であったといえる。そして，図4に示すように，コエトリのほかに，漁師百姓に特徴的なウシを用いた諸稼ぎとしてはモシキ（薪）や野菜の運搬販売もある。

畑で栽培する野菜の運搬販売は前述のように，横須賀の町場に行くコエトリのついでにおこなった。また，モシキトリ[6]は冬場にコエトリと併行して断続的におこなっていた。コエトリは便所に糞尿がある程度溜まるまで待つ必要があるため，その間にモシキトリをおこなった。さらにそうしたコエトリやモシキトリは海が荒れてミヅキ漁ができないときに主におこなっている。漁と農とコエトリ・モシキトリといった小稼ぎの関係は，天候や需給また労働の特性など，その時々における自然・経済・社会の状況に応じて組み合わされていた。

❹……漁師百姓と百姓漁師－海付きの村におけるふたつの志向性－

(1)稼ぎをめぐる生業戦略

従来「半農半漁」と一括される海付きの村の生活には，実は大きくふたつの志向性が存在することがわかった。ひとつは百姓漁師であり，もうひとつが漁師百姓である。農と漁の複合という生計維持のあり方全般からみると漁師百姓は百姓漁師の一類型と捉えることも可能だが，稼ぎ（金銭収

表１　百姓漁師と漁師百姓の対照①　－稼ぎの方途－

	百姓漁師	漁師百姓
戸数	多（最多層）	少
稼ぎ（現金収入源）	漁にほぼ特化	複数の稼ぎがある
稼ぎの担い手	男	男と女，老人
牛馬の所有	なし	あり
耕地の所有	少ない	多い
水田の所有	なし	あり
稼ぎの志向性	単一化の志向	多角化の志向
自家消費の志向性	複合性維持 （ただしコメは購入に頼らざるをえない）	複合性維持 （食糧に関する限り自給度は高い）

＊あくまでも両者の評価は相対的なものであるため，その記載は対照的となっている。

入）に焦点を当てるとその差は歴然となる。表１に示すように，稼ぎについてみてみると志向性の違いとして両者は対照することが可能である。歴史的には，稼ぎの生計全体に占める重要度が増すに従って，両者の差は大きくなっていったと言えよう。昭和 25-30 年という本稿の時代設定を考えると，両者はすでに別類型にあると考えた方がよい。

百姓漁師と漁師百姓は，自給性の側面では農と漁の複合生業を拠り所とする点で差はないが，稼ぎの側面では前者は漁という単一の生業に大きく依存していたのに対して，後者は農・漁・運搬業といった金銭収入を生み出す複数の生業レパートリーを有していた。つまり，百姓漁師が特定の生業に稼ぎを特化させたのに対して，漁師百姓は稼ぎを多角的にするという生業戦略を採ったといえる。すでに生計が自給的な範囲では収まらず，金銭収入をいかに得るかといったことが生計維持のうえで重要な要件となる昭和 25-30 年という時代背景を考えると，漁師百姓と百姓漁師の稼ぎをめぐる生業戦略の違いは生き方や人生観の違いといったところにまで及んでいる。

稼ぎに対する志向性の違いは，生業に関する家族間の役割分担にも影響を与えている（表２）。具体的にみてみると，稼ぎがほぼ漁に単一化している百姓漁師の場合には，その主たる担い手は男（主人）であった。女（主婦）もオカドリなどの漁をおこなうが，それはあくまで自家消費を目的とするものである。また，農も自家消費の範囲内でしかおこなわれないが，その主たる担い手は女で，男が携わることはほとんどなかった。それに対して，漁師百姓の場合は，男は農，漁，ウシによる運搬業など多角的に稼ぎに関わるのに対して，女は主要な稼ぎである農においてのみ担い手となる。

表２　百姓漁師と漁師百姓の対照②　－男女の役割－

	百姓漁師（稼ぎは漁に特化）	漁師百姓（複数の稼ぎを複合化）
男（主人）	唯一の稼ぎである漁に特化する	複数の稼ぎに関わる
女（主婦）	稼ぎには関わらない	農による稼ぎにのみ関わる

＊なお，生業上の役割として，老人は女（主婦）とほぼ同じ傾向を示す。
おもに老女は畑の管理，老男は磯漁などの自給的漁撈活動をおこなう。

見方を変えると，男の場合，漁師百姓も百姓漁師も稼ぎに大きくかかわる点では同様であるが，その内訳は対照的で，百姓漁師における男の稼ぎは単一化を志向しているのに対して，漁師百姓における男の稼ぎは単一化を避け多角化を志向していた。また，女の役割に注目すると，百姓漁師の

家では，女は漁以外にもさまざまな生業をおこなうが，そのほとんどすべてが自家消費を目的としたものであるのに対して，漁師百姓の場合には女は自家消費を目的にさまざまな生業を担うという点では同じであるが，では稼ぎには一切関わらなかったかといえばそうではなく農を通して稼ぎにも貢献している。

つまり，百姓漁師の場合は，男が稼ぎ，女が自家消費の生業を担うという役割分担が明確であったのに対して，漁師百姓ではそうした明確な男女の対比は不可能であるといえる。漁師百姓は家族みんなで稼ぎに当たるとともに，自家消費面でもみんなで担うという生業戦略をとっていることになる。

漁師百姓の場合，とくに稲作作業や麦作作業には壮年の男の力を必要とする場面があり，そうしたときには男も農作業に加わらざるをえなかったからである。とくに春の水田の犁耕や代掻きには畜力は不可欠で，そのときウシを使うのはかならず男であった。少なくとも百姓漁師が「指先が鈍るから鍬を持たない」というように農作業とは一線を画す姿勢は漁師百姓の男に見られない。百姓漁師では男の仕事として稼ぎとなる漁が最優先され，農の営みにはいっさい規制を受けないのに対して，漁師百姓の場合には農耕暦が漁撈活動をさまざまに規制している。そうした意味では，耕地の多寡とくに水田の有無が漁師百姓と百姓漁師の生業戦略や生き方の違いをもたらしたといえる。

こうした差異は，村で生活するうえで，その家が置かれた社会的・経済的なさまざまな条件のもと，稼ぎをどのように最適化するかによって生じたものと考えられる。F家のように9反に及ぶ水田と6反の畑を有し，かつ農を維持してゆくために牛馬を飼養しなくてはならなかった漁師百姓の場合，百姓漁師のような生業戦略（自給的にはいくつもの生業を複合し，かつ稼ぎは漁に特化する，そして，男が稼ぎを担当し，女が自家消費の生業を担う）は採用し得なかったと考えられる。とくに農にいっさい男は関わらないという選択肢は，漁師百姓にはありえない。

最後に，年寄りおよび子どもの役割について言うと，ともに労働総量は少ないが，たいていは女（主婦）と同様の生業従事パターンを持っている。この点は，漁師百姓，百姓漁師ともに共通する。とくに農への関与の度合いは大きい。ひとつには農の場合には年寄りや子どもにも担える作業が多くあるのに対して，漁は磯でのオカドリを除くと，身体的な厳しさを伴うため主たる担い手とはなりづらいことが関係している。とくに船を使って沖に出なくてはならない漁や，たとえキワ（岸近く）でも水に潜ったり，重い網を操作したりするような身体的負荷の高い漁はそうである。

(2)海付きの村における水田の存在意義

海付きの村の中でもとくに本稿で注目したような磯付きの村の場合には，山がすぐ集落の裏に迫っており，したがって耕地は山の中に存在する。そのため，耕地の多くは畑であり，水田は小さな谷筋に開かれているにすぎない。戸数300の佐島にあって水田の面積は8町6反歩ほどにすぎず，当然のことながら所有者の数は20戸ほどに限られていた。その多くは本家筋や近代においては地主の階級にあった家とされ，それがそのまま漁師百姓の家と重なる。こうした状況はなにも佐島だけにとどまらない。たとえば，瀬川清子は日間賀島（愛知県）の海付きの村の例を報告しているが，そこでも水田の所有者は庄屋ばかりであった［瀬川，1949］。

生業レパートリーを比べてみると，基本的に百姓漁師にいえること（自給的生業のバリエーショ

ンの多さ）は漁師百姓にも当てはまる。しかし，その生業戦略のうち稼ぎにおいては志向性の違いが際立っている。そうした違いを生み出す背景として注目されるのが水田所有の有無である。それは程度の違いなどというものではなく，水田を所有するもの（漁師百姓）としないもの（百姓漁師）というように峻別される。

当然，漁師百姓の場合，水田を含めた耕地の所有（耕作）面積は，百姓漁師に比べはるかに大きい。また，多くの耕地を耕作するために牛馬を飼養する必要も出てくる。と同時に，飼養する牛馬を用いて運搬業を稼ぎのひとつに加えることが可能になった。したがって，漁師百姓の場合，百姓漁師に比べると稼ぎの方途は多角化しており，結果的に生業の複合度は高いことになる。

つづいてコメの問題に触れてみる。稼ぎの面において対照的であった百姓漁師と漁師百姓ではあるが，自給的な面においてはともに生業の複合性を志向するものであったことは前述の通りである。しかし，自給的な面において１点だけ大きな相違点となり，生業複合度を大きく左右するのはコメの存在である。水田を持たない百姓漁師にとって基本的にコメは買うものであったのに対して，漁師百姓はコメの自給が可能であった。

そのことを考えると，百姓漁師は生業複合による自給性の維持を志向したとはいっても，その度合いは漁師百姓よりもかなり低いといわざるをえない。とくに近現代においてはコメが主食の地位にあることを考えると，それを購入に頼るか自給できるかの差は大きいと言えよう。

反面，百姓漁師にとっては稼ぎの多くは主食であるコメの購入に向けられていたわけで，稼ぎの持つ生計上の重要度は大きなものがあった。また，自給性の面ではいくつもの生業を複合し，かつ稼ぎは漁に特化する，そして，男が稼ぎを担当し，女が自家消費の生業を担うという百姓漁師の生計維持の志向性は主食たるコメを購入に頼らざるを得なかったことによる選択であったと考えることもできよう。つまり，より効率よく金銭を稼ぎ，コメの購入に支障が出ないようにするために，男は稼ぎとしての漁に特化したと考えられるのである。この点は，海付きの村における水田所有の意義を象徴するものである。

最後に，漁師百姓にとって水田の持つ意義とはなにか検討しなくてはならないであろう。前述のように，繁忙期の行動や農耕儀礼のあり方をみると，漁師百姓といえども稲作に絶対的な価値を置いていないことは明白である。つまり，佐島のような海付きの村においては，生業労働の上で稲作は畑作や海の漁と並立的な関係にあったにすぎない。

しかし，一方で，水田の存在やその所有のあり方が，海付きの村では社会的階層を示すものとなっていることも事実である。つまり，水田はコメを作るためだけの場ではなく，海付きの村にあっては社会階層を映し出す象徴的空間として存在したといえる。そして，その所有の有無は生業戦略にも影響を与えた。そうした生業戦略の差が佐島では「百姓漁師」と「漁師百姓」の違いとして顕在化したといえる。

ひと言でいえば，水田所有が漁師百姓という自意識を生み出していていると考えられる。そして，それは村内における家格意識を反映している。水田所有は今回の調査の時間軸とした昭和25-30年[(7)]という時代に至る長い歴史の蓄積を反映するもので，その意味で水田稲作は象徴的な生業[(8)]といってよい。経済的に水田所有自体はそれほど重要ではなくとも，象徴的な意味でその所有は家格や自意識を明確に示すものとなっていたのである。

おわりに

漁師百姓という言い方が，自己認識であり他者表象として意味を持ったのは農が稼ぎとして漁と同様の価値を有し，かつウシを用いて諸稼ぎが可能であった高度経済成長期前までであった。それ以降は，漁師百姓の稼ぎのうち漁の稼ぎは維持されても，農とウシによる稼ぎはほとんど意味をなさなくなった。

その代わりに家計としては，若い世代による会社務め等による収入が大きな意味を持つようになってきた。とくに高度経済成長以降，その傾向は強まった。かつて陸の孤島と呼ばれた佐島もトンネルなどの陸路が整備[(9)]され，さらに自家用車が普及するとともに，横須賀・逗子・鎌倉，そして横浜へ通勤が可能な地域となった。そうした家計に占める農とウシの稼ぎの無意味化は結果的に百姓漁師と漁師百姓の差を縮め，さらには農と漁の生業複合という生き方自体の消滅に繋がった。農業センサス及び漁業センサスからはそうした様子が如実に読み取れる。

世界農林業センサス集落カードによれば，1970年には総戸数372戸のうち73戸が農家となっている。以後，1980年：農家数39戸（総戸数439戸），1990年：18戸（514戸），2000年：8戸（662戸）となる。また，農家のうち専業はほとんどなく，1970，1980，1990ともに1戸に過ぎず，ほとんどが第2種兼業である。また田のある農家の変遷をみてみると，1970年：32戸（総水田面積4.8㌶），1980年：9戸（1.2㌶），1990年：6戸（1.3㌶），2000年：1戸（0.08㌶）となっている。高度経済成長以降，新住民が増えて総戸数が10年に100戸単位で増加しているのに対して，農家数は減り続け，2000年にはとうとう8戸にまでなっている。

そして2009年現在，民俗空間としてのヤマ（畑があり，ヤトには田がある）は大規模な住宅開発が進められている。それにより，ヤマは削られ，ヤトは埋められている。総開発面積は41㌶，それにより分譲される住居は667戸に及ぶ。これは旧住民の数を大きく超えるもので，新たな村の誕生と言ってよい。

そうした状況は漁業も同じである。1998年調査の漁業センサスによると，総戸数575戸のうち漁業世帯は136戸（漁業世帯員数466人）となっている。漁家割合は約24パーセントに過ぎない。また，漁業世帯のうち農業と兼業する家は0である。センサスでは佐島は第2種漁港を有する漁業集落と認められるが，すでに主な産業は漁業でも農業でもなく第3次産業となっている。つまり，1998年には，漁師百姓はおろか，百姓漁師もセンサスの上では佐島から消滅したことになる。

註

（1）――水田9反を耕作するF家は，耕作面積からみると佐島では最大の稲作農家ということになる。しかし，耕作する水田の多くが隣村にあることから，通常は佐島内の谷戸田を所有する漁師百姓とは若干性格を異にする。隣村の耕地を入手することで，さらに稲作への特化度を高めた漁師百姓という位置づけができる。

（2）――刈り取ったイネを穂を下に向けて置くのは茎の栄養が籾に下がるようにするためとも説明される。

（3）――ムギカラを畑で焼くことについては，雑草の芽を抑制する機能があるとも説明される。

（4）――ムギコキの時期にはテングサの採集がおこなわれるが，商売としてテングサによる収入がよいときはム

ギコキは後回しにして家族総出でテングサトリをしたという。自家消費用の作物であるムギの脱穀は少しぐらい遅れてもよしとされる。また，田植えの時期はアオリイカとトビ（トビウオ）の漁とが重なる。そのため，専門の田植え人足を何人も雇っては，ごく短期間に田植えを終えるようにする。男（主人）は自分が田植えの手伝いを最小限にしてアオリイカ漁をすることと，自分の分まで人を雇って田植えをするのとでは，どちらが金銭上有利かを考えていたという。かつてはアオリイカは高価だったため，多くの田植え人足を雇ったが，アオリイカの値が下がれば男も漁を休んで田植えの手伝いをすることになる。

（5）――コエトリによる金銭収入の試算は，聞き取り調査をもとに昭和20年代のものとしたが，さらに検証の必要がある。

（6）――モシキトリはマキキリとも言う。モシキトリは金銭収入を目的としたものであるが，マキキリといった場合は百姓漁師による自家消費の範囲にとどまるものを指すことが多い。

（7）――昭和25-30年当時の水田所有を論じるとき，第2次大戦後の農地解放の影響を考慮する必要がある。しかし，佐島では農地を解放させられるような大地主はほとんどいなかったとされ，水田所有に関しては農地解放の影響は少なかったと推察される。その検証は今後の課題としたい。

（8）――象徴的生業とは，その地域や家にとっては長い歴史を持ち，膨大な記憶を蓄積する生業である。そのため，社会や経済だけでなく，住民の世界観とかかわり，信仰・儀礼といった精神世界にまで深く入り込んでいる生業となる。日本の農村では稲作がその位置にあった［安室，2003］。

（9）――横須賀や鎌倉に出るためには，昭和2年に佐島隧道が開鑿されるまで，まさに海路ないしは山越えの道しかなかった。

引用参考文献

網野善彦　1991 『日本の歴史をよみなおす』筑摩書房
泉　雅博　1992 「近世北陸における無高民の存在形態－頭振について－」『史学雑誌』101編1号
卯田宗平　2003 「『両テンビン』世帯の人々」『国立歴史民俗博物館研究報告』105集
神奈川県教育庁指導部文化財保護課　1971 『相模湾漁撈習俗調査報告書』神奈川県教育委員会
河岡武春　1976 「低湿地文化と民具（1）（2）」『民具マンスリー』9巻3･4号
河岡武春　1977 「漁民の水鳥猟」『民具マンスリー』10巻4号
川名登・堀江俊次・田辺悟　1975 「三浦半島における近世漁村の構造」村上直編『近世神奈川の研究』名著出版
瀬川清子　1949 「海村婦人の労働」柳田国男編『海村生活の研究』［1975年，国書刊行会，復刻］
高桑守史　1983 『漁村民俗論の課題』未来社
高桑守史　1984 「伝統的漁民の類型化にむけて」『国立歴史民俗博物館研究報告』4集
武井弘一　2006 「山方の百姓」後藤雅知編『身分的周縁と近世社会1 －大地を拓く人びと－』吉川弘文館
田辺　悟　2005 「日本磯漁伝統の研究Ⅷ」『千葉経済論叢』31号
田村　勇　2002 「生業の変化と複合の地域相」小島孝夫ほか編『海と島のくらし』雄山閣
辻井善弥　1977 『磯漁の話』北斗書房
辻井善弥　1980 『ある農漁民の歴史と生活』三一書房
平野哲也　2004 『江戸時代村社会の存立構造』お茶の水書房
深谷克己　1993 『百姓成立』塙書房
安室　知　2003 「複合生業論のこれから」『長野県民俗の会会報』26号
安室　知　2010 「『百姓漁師』という生き方－漁村類型としての『半農半漁』批判－」『国立歴史民俗博物館研究報告』162集
柳田国男　1949 「海村調査の前途」『海村生活の研究』［1975年，国書刊行会，復刻］
吉田伸之　1998 『近世都市社会の身分構造』東京大学出版
吉田伸之　2003 『身分的周縁と社会＝文化構造』部落問題研究所

（神奈川大学大学院歴史民俗資料学研究科，国立歴史民俗博物館共同研究員）

（2009年9月24日受理，2010年5月25日審査終了）

Bulletin of the National Museum of Japanese History
Vol. 162 January 2011

Farming-Fisherman and Fishing-Farmer：Subsistence Composition and Paddy Field in the Sea Village

YASUMURO Satoru

This article is a sequel to the preceding article *The way of life named Farming-fisherman: "a farming and fishing village" criticism as the fishing village type* [Yasumuro, 2010]. This article studies the existence of various ways of life in the same sea village by focusing on "farming-fisherman" and "fishing-farmer" that indicate the self-recognition of people in the village.

It was found that there are two major orientations in the life of the sea village which has been generalized as a "farming and fishing village" conventionally. One is the farming-fisherman, and the other is the fishing-farmer. There is no difference between the farming-fisherman and the fishing-farmer in the aspect of the subsistence composition of farming and fishing. However, while the former depended largely on fishing, the latter had several subsistence methods to produce income such as farming, fishing, transportation, etc. In other words, while the farming-fisherman earned a living with a single subsistence method, the fishing-farmer implemented a subsistence strategy to earn a living with multiple methods.

The difference between them in the orientation of earning also affected the sharing of roles among family members for subsistence. In the case of the farming-fisherman, the division of roles was clear: men earned a living, and women assumed self-consumption. Meanwhile, in the case of the fishing-farmer, such clear division between men and women was not possible. This means that the fishing-farmer implemented a subsistence strategy in which the whole family earned a living and also assumed self-consumption.

As a background to the difference between them in the orientation of subsistence strategy, particularly earning, the ownership of paddy fields draws attention. There is a clear distinction between those who owned paddy fields (fishing-farmer) and those who did not (farming-fisherman). The degree of their subsistence composition also depended largely on rice. For the farming-fisherman who did not own paddy fields, rice was basically something to buy. On the other hand, the fishing-farmer was able to produce rice himself.

At the same time, paddy fields and their mode of ownership indicated the social stratum in the sea village. This means that paddy fields existed not only for producing rice, but also as symbolic spaces which reflected the social stratum in the sea village. Whether they owned paddy fields or not was

also reflected clearly in the difference between them in subsistence strategy. This emerged as the difference between the farming-fisherman and the fishing-farmer in Sajima.

Key words: Farming-fisherman, fishing-farmer, sea village, subsistence composition, paddy field